

## 耳下腺結核の一例

中安一孝<sup>1)</sup> 峯田周幸<sup>2)</sup> 細川誠二<sup>2)</sup>  
高橋吾郎<sup>2)</sup> 岡村純<sup>2)</sup>

1) 沼津市立病院耳鼻咽喉科

2) 浜松医科大学耳鼻咽喉科

近年結核は再興感染症として注目されており、頭頸部領域における結核感染症では早期の診断が困難な場合もある。今回我々は術前に腫瘍性病変との鑑別が困難であった耳下腺結核の一例を経験した。

症例は65歳女性で、主訴は左耳前部腫瘍であった。軽度の違和感を訴える以外には皮膚の発赤や、顔面神経麻痺は認めなかった。左耳下腺内に弾性硬の腫瘍を複数個触知し、術前の画像診断では耳下腺腫瘍が疑われた。穿刺吸引細胞診を施行したが、組織型の確定はできなかった。腫瘍は増大傾向を認め、本人の希望もあり腫瘍摘出術を施行した。術中の迅速病理診断では乾酪壊死を伴う肉芽腫がみられ、結核感染症が疑われた。術後の検査ではガフキーは陰性、摘出検体からのPCRは陰性、喀痰のPCRは陰性、クオンティフェロン®TB-2Gは陽性であった。耳下腺結核と診断し、内科外来で結核の治療を受けることとなった。

本症例では結核の診断にクオンティフェロン®TB-2G検査が簡便で有用であった。若干の文献的考察を加え報告する。